

文化論集第 59 号
2021 年 3 月

消 息

小澤悦夫先生をお送りするにあたって

小澤悦夫先生はめでたく古希を迎えられ、早稲田大学の定めにしたがって、本年 3 月末日をもって退職されます。先生のご退職にあたって、学部を代表して一言ご挨拶を申し上げます。

小澤先生は東京外国語大学外国語学部をご卒業ののち、東京大学大学院人文科学研究科に進まれ、修士課程および博士課程を経て、1986 年 4 月に早稲田大学商学部専任講師として嘱任されました。その後、88 年助教授、94 年教授に昇任され、35 年の長きにわたって早稲田において教育と研究の時間を過ごされました。この間、2000 年 9 月から 2 年間、嶋村紘輝学部長、鈴木宏昌学生担当教務主任の下で学生担当教務副主任をお務めになりました。学生思いの先生ですから、学生担当副主任の職は適任であったと思います。

先生の主たる研究対象は英文法であり、2013 年にはそれまでの成果をまとめられた『英語学試論集』（私家版）を出版されています。英文法に関する論文のほか、英語教育や語学教育にも関心を示され、多くの論文をまとめられました。「英語」の講義に加えて総合教育科目演習（プロゼミ）では「実用英語演習」も担当されました。研究および教育にかかわる業績の紹介は森田彰先生による消息をご覧ください。

さて、時はさかのぼり 1986 年 4 月、旧 12 号館 2 階の教室においてわれわれ 2 年 19 組の英語講読の授業が始まりました。教室に入室された担当教員は専任講師として着任されたばかりの小澤先生その人でした。テキストは国際情勢など時事英語に関する文献だったと記憶しています。いまでは好々爺的な雰囲気ですが、当時はまだ 30 代半ばの先生ですから、とても厳しかった思い出があります。毎回、数ページ分の予習が必要とされ、難解な英文の和訳に苦勞しました。しかし、私自身にとっては学ぶ意義のある授業であり、1 年をかけて文献を読み終えた感が強かった思い出があります。後日、私が商学部の教員になった折、先生に授業を受けていたこととお話すると、早速、過去の出

欠簿や成績を確認されたのか、「一回も休まずに全出席でしたね。」と言われたことがありました。先生の35年にわたる教育活動において、学生への接し方、教授法は当時と大きく変わることなく、わかりやすい授業を展開され、多くの学生を魅了したものと確信しています。先生のご趣味は将棋ですが、夏の暑い日には、冷房が完備されていない当時の教室で、棋士が使う扇子で仰ぎながら授業を行っておられました。それだけ熱の入った授業だったのでしょう。

私が模擬授業のため、横浜にある高校を訪問した際、大学時代に一緒だったという英語の先生にお目にかかりました。学生時代の小澤先生はとても真面目に勉強されていたことをうかがいました。これはいまもって変わっていません。また、都内の高校を訪問した折には、進路指導の担当の先生が小澤先生のお嬢さんということもありました。お嬢さんも英語の先生をされていて、親子で同じ教員の道を歩まれ、仲睦まじさを感じたものです。

森田先生も紹介されていますが、小澤先生は将棋のほかに、歌舞伎や演芸の鑑賞もお好きです。早稲田大学には「学芸会」という歌舞伎や演芸の鑑賞を楽しむ教員の組織があります。私は10年以上にわたって学芸会の幹事を務めてきましたが、毎年11月国立劇場で上演される歌舞伎の席で先生にお目にかかってきました。とても多趣味の先生であるといえます。また、愛犬のコロすけくんが亡くなった折には、年末に喪中のはがきを頂戴しました。ここから、家族の一員としてコロすけくんに接し、どれだけ大切に思われていたのか、先生の慈しみの心がどこに由来するものか、をうかがい知ることができました。

小澤先生がご定年を迎えることに寂しさを感じるのは私だけではないでしょう。先生が早稲田に着任されたときに私は学部学生として先生に接し、いまは学部長として先生をお送りしようとしています。先生との触れ合いを思い起こすと、35年の時間の経過のみならず、不思議な因縁を感じざるを得ません。

先生のご退職後、後に残されたわれわれは不安でいっぱいですが、先生の大学や学部に対する思いを心に刻み、前進あるのみと考えています。先生の早稲田大学とりわけ商学部に対するご貢献に心から感謝を申し上げます。これからも年に1回、国立劇場でお目にかかる機会があるものと思われませんが、いつまでもご健康に留意され、お元気に過ごされることを祈念いたします。

小澤先生，長きにわたり，ありがとうございました。

早稲田大学商学部長
早稲田商学同攻会会長
横山 将義